新　聞　2009年(平成21年)12月3日　第3種郵便物認可

旧陸軍調布飛行場・三鷹側敷地

戦闘機プロペラ出土

「飛燕」「五式」と確認

旧陸軍調布飛行場（三鷹、調布、府中市）の三鷹市側の敷地から、軍用機3機のプロペラと機体の頭部が発見された。陸軍の主力戦闘機だった「飛燕」と、飛燕を改良した「五式戦闘機」のものとみられる。同飛行場から戦闘機のプロペラが見つかったのは初めて。市教委は貴重な歴史遺産として、公開を含めて保存・活用方法を検討している。（佐藤清孝）

見つかった「飛燕」などの軍用機のプロペラ。左端の筒状部品は五式戦闘機の頭部の部分＝調布市西町

市教委公開検討　米軍から隠すため埋めた？

見つかったのは、三鷹市が都立武蔵野の森公園の一角で進めている大沢総合グラウンド整備工事（約5㌶）の野球場予定地。11月中旬、深さ約2㍍から3枚羽根のプロペラ三つが出土した。その後、プロペラが埋まっていた約50㌢下から機体の頭部の一部も発見された。

プロペラはかなりさびついていた。どれもかなり腐食が進み、長さは1・2㍍～0・5㍍ほどしか残っていない。

市教委が航空ジャーナリスト協会理事の小室克介さん(73)＝調布市若葉町＝に調査を依頼したところ、プロペラ部品の特徴から二つが「飛燕」で、もう一つが改良型の「五式戦闘機」とわかった。

また、機体の頭部はスピンナー（回転帽）と呼ばれ、プロペラにつながる。直径50㌢、長さ50㌢で、一部腐食しているが、原形をとどめていた。一緒に出土した「五式」の特徴を示す部品を組み合わせたところぴったりと合い、「五式」と確認された。

小室さんによると、五式は大戦末期に造られ、その数は400機に満たないという。海外では唯一、英国内で展示されている現存機を見ているが、「国内では初めて部品を見た。よくここに残っていたと思う」と感激している。

一方、「飛燕」は陸軍の主力戦闘機として採用され、3千機以上が造られた。調布飛行場には1943年7月に配備されたが、敗戦後は連合軍の命令でプロペラを外し、本体は米軍がガソリンをかけて燃やしたとされる。

現地を視察した郷土史家の古橋研一さん(62)＝調布市国領町＝は今回の出土について「占領されても戦闘機は渡したくない、と米軍が入ってくる前に象徴だったプロペラなどを意図的に埋めた人がいるのでは」と推測する。

市民グループ「調布飛行場の掩体壕を保存する会」の上野勝也さん(82)＝同市深大寺東町＝は感慨深げだ。掩体壕は軍用機の格納庫で、同飛行場周辺では戦時中飛燕が納められた。上野さんは昨年府中市の市史跡に指定された白糸台掩体壕と、武蔵野の森公園（三鷹市）で保存されている2基に「歴史遺産としてぜひプロペラを展示・公開してほしい」と話している。

キーワード　飛燕と五式戦闘機　飛燕は三式戦闘機の愛称。ドイツのダイムラーベンツの技術を基に、国産化した水冷エンジンを搭載した。高空能力に優れていたが、エンジンの故障に悩まされた。飛燕のエンジンを直径の大きな空冷に変えたのが五式で、機体はスマートな飛燕をそのまま使ったため、頭でっかちのずんぐりした格好になった。陸軍が採用した最後の戦闘機で、敗戦が近い1945年4月から配備された。